大阪港夢洲地区物流懇

搬出入予約制に前向き

初会合　CTゲート混雑解消へ

【関西】2025年の大阪・関西万博開催を控え、大阪港夢洲地区の物流対策を議論する「大阪港夢洲地区の物流に関する懇談会」(事務局=国土交通省近畿地方整備局、近畿運輸局、大阪市港湾局)の第1回会合が2日、同港湾局であった。万博や現在誘致を進めているIR(統合型リゾート)の会場建設工事を踏まえ、港湾物流との共存に向け情報共有を図るのが狙い。会合ではゲート前の渋滞対策で、搬出入の事前予約制の導入について肯定的な意見が上がった。

関西の産官学で構成する国際物流戦略チームの下に設置、ロジスティクス経営士の上村多恵子氏が座長を務める。大阪港運協会、夢洲コンテナターミナル(DICT)、辰巳商会、大阪府トラック協会、阪神国際港湾会社、関西経済連合会を構成員とする。

会合では、上村座長が万博やIRの整備による影響について「漠然とした不安を抱えていると思う」と言及、情報共有を進め課題解消につなげたい意向を示した。近畿地整の安部賢港湾空港部長は「夢洲が渋滞、混雑のないトップランナーの港になっていくよう進めたい」と述べた。

議事では夢洲地区の渋滞と取り組みの現状について、事務局側から報告があった。DICTでの取扱量は約89万TEUで大阪港全体の43%に及ぶことや、待機車列は空コンテナ搬入で最大5・2キロに及ぶとした市港湾局の調査結果などについて言及があった。

万博・IRに向けたインフラ整備では、アクセス道路となる此花大橋、夢舞大橋、夢洲幹線道路を現行の4車線から6車線化するほか、物流と観光の動線を分離するための高架道路の整備といった計画について説明があった。

また市港湾局はコンテナ搬出入に伴うゲート混雑解消策として、国が開発を進める新・港湾情報システム(CONPAS)などの導入を念頭とした、搬出入予約制についても検討していることを説明したほか、事務局から集中管理型ゲート設置の提案もあった。

意見交換では、事業者側からハード・ソフト面を切り分けた対策の必要性、トラック運転手の長時間労働の現状を踏まえた働き方改革への考慮のほか、CONPAS導入に対する前向きな声などが寄せられた。

またコンテナ関連だけでなく夢洲に出入りする車両そのものが増加しているとの指摘も出た。さらにCONPAS導入は夢洲に限らず、隣接の人口島にある咲洲コンテナターミナルなどでも整備を進めるべきとの意見も上がった。

会合は四半期に一度のペースで開催の方針で、次回は来春をめどに実施する。